

# 5

## “The Longevity Revolution” (2008年) 序文

平均寿命は、ここ100年足らずでそれ以前の5,000年間を上回る延びを示した。青銅器時代から19世紀の終わりにかけての平均寿命は約20歳から50歳未満へとおよそ29歳延長したにすぎない。ところが、20世紀初頭以降は先進工業国で平均寿命が77歳を超え、30歳を上回る未曾有の延びとなった。人口高齢化は、世界各地で急速に発生しつつある。アメリカでは、65歳以上の人口が2025年までにほぼ倍増すると考えられている。かつては人口の2～3%であった高齢者が今やありふれた存在となった。今日のアメリカでは、女性が男性より5年以上長生きする。さらに、平均余命に見られる延びのほぼ20%は、これら65歳の人口で発生する。

私は、このような未曾有の人口統計学的な変化を「長寿革命 (Longevity Revolution)」と名づけている。かつては少数の人々の特権であった長寿が、先進国においても発展途上国においても、急速に、多数の人々がたどる運命となった。古来望まれた長寿が実現したにもかかわらず、そして今後さらなる長寿が期待できるにもかかわらず、諸手を挙げて歓迎されないのはなぜなのだろうか。

善意からアメリカの将来に深い懸念を抱いている人々は、「高齢者を社会の一員として受け入れる余裕はあるのか」「増加する定年退職者数に圧迫されて、社会保障やメディアケアが破綻するのではないか」など、人口高齢化と長寿の増進が及ぼす影響について厳しい質問を提起している。他の国々でも同様だ。企業のトップ、エコノミスト、政治家、時事解説者がこれら重大な問題を提起するのはとても良いことである。しかし、残念ながら、こうした批評は社会全体に不安や悲観を広める結果となっている。

長寿に対しては矛盾した感情が浸透しているが、私は常に楽観的である。私たちには、現在の例外的な人口統計シフトを利用する手段があるからだ。しかし、そのためには、個人的経験としての高齢化と文化的姿勢の双方をまさしく全面的に変容しなくてはならない。

私は、思慮に富む一般の人々を念頭に本書を執筆した。主たる目的は、長寿の増進と人口高齢化の起源および課題、それらへの適応について述べ、晩年にまつわる現代の

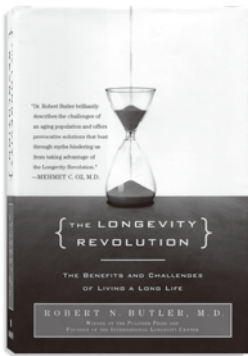
想定に疑問を呈することだ。啓蒙された市民による積極的な行動を信奉する私の立場から、本書の全体的主眼は行動計画および裏付けとなる知識の提示を指向している。

本書は六つの部分に分かれている。パートIIは、長寿革命の起源について述べ、パートIIでは年齢差別、家族の変質、長寿による様々な障害を含め、長寿がもたらす主な課題を概略する。

パートIIIでは、高齢化に関連する生物医学の詳細を説明する。ただし、科学研究を実施するには費用、それも多額の費用がかかるため、ここでは差し迫った資金集めの必要性を考察することから始める。アルツハイマー病の破壊的な実態は、今日の科学者が直面する最大の課題の一つである。神経科学の進歩にも関わらず、アルツハイマー病の原因は不明であるうえ、その進行を抑える有効な方法は何も発見されていない。長寿の可能性を最大限に実現するには、アルツハイマー病と闘う大がかりな官民一体型の研究に着手しなければならない。最後に、高齢化の進化論から極めて有望と思われる発見まで、高齢化と長寿の基礎生物学を取り上げる。

パートIVは本書の中核として、それまでの各パートで提起された様々な課題への解決策を提示する。社会が健康増進とヘルスケアを改善できる方法、寿命の延びに対して財源を確保する方法を述べる。アメリカの場合、達成までは長い道のりとなる。アメリカ人の平均寿命は過去最長の77.9歳に達したものの、世界順位がこの20年で11位から42位へと下がっている。言い換えれば、世界一富める国がヨルダン、シンガポール、ケイマン諸島、その他の国や地域に遅れをとっているのだ。アメリカは高齢化に対する研究投資を行っていない。アメリカの医学校のうち、老年科があるのは145校中11校にすぎない。これに対し、イギリスの場合、老年科は第2位の専門学科である。アメリカ人に必要なのは、疾患プログラムではなく「健康」プログラムなのだ。

これらはすべてが膨大な事業であり、高齢化と長寿に関する主導的な政策の展開が必要となることは間違いない。特に、ベビーブーマーはその政治力を行使して、政策の変更を実現しなければならない。



パートVでは、必要な注意事項をいくつか説明する。世界各地には圧倒的な平均余命の不均衡が存在し、グローバル化の深刻な障害となっている。シエラレオネの子どもの平均寿命は約34歳である一方、平均寿命世界第1位の日本では82歳となっている。さらに、産業公害から結核やAIDSなどの様々な疾患、肥満の蔓延に至る重大な諸々の脅威に対処しなければ、得られた長寿が失われる可能性もある。

最終のパートVIでは、生活の質の問題と長寿の将来を論じる。寿命が今後も伸び続けたとき、私たちは延長された年数を有効に利用できるだろうか。寿命が伸びた分、他者との関係や世界との関係は成熟の度を高めるだろうか。

私は、本書を通じて、文化的、科学的、社会的思考に貢献し、とりわけ長寿革命がもたらす課題について国を挙げての議論を促したいと思う。私の意図は迅速かつ現実的だ。いわゆるベビーブーマーと呼ばれる1946～1964年に出生した7,600万人のアメリカ人は、いくつかの点で、アメリカ史上最多数の世代である。あらゆる人を驚かせたその数の結果、赤ん坊の頃にはおむつが不足し、子ども時代には学校が足りず、成人しても必ずしも良い仕事に恵まれるわけではなかった。2011年にはベビーブーマーの最初の世代が65歳に達することから、高齢化したこの世代に様々なリソースが不足するのではないかと懸念する意見が多くある。

ベビーブーマー世代は、不幸な老年期というリスクを抱える世代であると同時に、アメリカにおける高齢者のイメージを変容させる重要な鍵であると私は考える。ベビーブーマーは自分たちの両親を通じて高齢期を理解した結果、経済的に安定した活気のある健康的な余生を望んでいる。今日の高齢者よりも上手に年をとることを望んでいるのだ。そして、とりわけ医学と生物科学の分野が長寿革命の発生を促したため、長寿革命という新たな現象への適応と利用に向けて、必要な調整への貢献と実現を果たさなければならない。

ベビーブーマーは、極めて影響力の大きい利益集団である。彼らは長寿の意味を変革することができる。思慮に

富んだリスクの分析と高齢問題への正面からの取り組みによって、将来に向けた洞察や計画より危機管理を好むアメリカ人の傾向には意外に早い時点で異議が唱えられるだろうと、私は期待している。ベビーブーマーが白髪になってからアメリカの高齢者には居場所がないと気づいたのでは、遅すぎる。同時に、社会はジェネレーションXとジェネレーションYに対しても準備を整える必要があり、また、これらの世代も順番に自分たちの役割を果たさなければならない。

長寿革命の様々な課題への対応を成功させるには、伝統的な知識に疑問を投げかける大胆さが必要である。本書では、高齢人口が社会に及ぼす影響に関して、従来の神話に反論する。例えば、以下の内容は「誤り」である。

- 出生率の低下は不利である。
- 福祉国家型の社会保障は維持できない。
- 高齢人口は医療費の上昇を招く。
- 過剰な医療費は寿命末期に関連している。
- AARP（全米退職者協会）はワシントンで最強のロビー団体である。
- 年齢に対する偏見は法律と訴訟により終結した。
- 高齢労働者は生産性が低い。
- 高齢者は、子どもや若者に比べ、公私ともに多くの支援を受けている。

余分に与えられた30年を有効に活用するには、複数の根本的な社会的変化が要求される一方、科学も健全な成長を遂げている。それこそ私たちをここまで牽引した源であり、さらなる長寿の伸びを約束するものである。科学の進歩は、人生の終末期だけでなく一生を通じて活力と健康をもたらすべきである。今後、活動的で精神的に健全な高齢者の割合が増加していこう。こうした高齢者の姿を当然とみなしてはならないが、この傾向は継続することが可能であり、また、喜ぶべきことである。本書を通じて、何よりも、長寿の増進が究極の達成であることを皆さんが納得される一助となれば幸いである。